

第三回 「アイルランド大統領公邸での休日」

岡部 芳彦

ブリストルから最短の外国アイルランドに休日を兼ねて行ってきました。どれくらい近いのかと言えば、飛行機で 40 分、フェリーだと 3 時間ほどだそうです。休日を「兼ねて」というのは家族も同行したからです。慣れぬ異国の地で子育てを妻に任せきりというわけにもいかないのでも 2 歳の娘も連れて行きました。

訪問先の一つであるアイルランドの首都ダブリンのトリニティー・カレッジはヨーロッパ最古の大学の一つで 1582 年創設、日本では本能寺の変で織田信長が自害した年です。創設者はイングランドの女王エリザベス 1 世です。卒業生には『ガリヴァー旅行記』を書いたジョナサン・スウィフトなどがいます。ダブリンは首都なので大都会ですが、どこかのんびりした雰囲気でもあり、大好きな町の一つです。

トリニティー・カレッジで研究対象の調査を終えたあと、アイルランド人の友人の計らいで、娘と一緒にアイルランド大統領公邸を訪問することになりました。遊びたい盛りの娘と一緒に大統領公邸は冷や汗の連続です。最近ではオバマ大統領やエリザベス女王なども歩いたという公式の賓客を迎えるための廊下で満面の笑みでこちらを向いていたので写真を撮ろうと思ったら、いきなり背を向けて駆け出します。アイルランド初の女性大統領であるメアリー・ロビンソン女史の胸像の台座に体当たりしてグラグラ。夜の晩餐会の準備が終わったボールルームではテーブルの下に潜り隠れんぼと大はしゃぎです。

大統領が各国の首脳などとお会いする部屋に通されると、そこには重厚感のある扉がありました。娘も何か違うと感じたのか、大喜びでそのドアを何度も何度も太鼓のように叩きます。すると突然扉が開き、金色のきらびやかな飾章をつけた陸軍将校が小声で「少し下がっていただけますか?」と言いました。少し緊張した面持ちだったので、てっきり娘の大騒ぎぶりを怒られるのかと思い娘を抱っこしようとしやがんだ次の瞬間に、姿勢を正して「皆様、マイケル・ヒギンズ大統領です」と言うではありませんか。恐る恐る娘と顔を上げるとそこには優しい男性が立っておられました。ヒギンズ大統領は、政治家としてのキャリアだけではなく人権活動家や文筆家としても知られ多彩な才能をお持ちです。どうやら先ほど娘が叩いていたのは大統領執務室のドアだったようです。ただ、後で聞けば初めから大統領とお会いするための訪問だったのですが、うかつにも



突然駆け出した娘。左がロビンソン元大統領の胸像です。



真ん中がヒギンズ大統領。副官の陸軍将校の後ろが例の扉です。

普通の見学だと思い込んでいて、僕の服装はいわゆる「娘と散歩に行く日曜日のお父さんスタイル」です。大統領と握手する際に、「こんな服ですみません」と申し上げたら「小さな娘さんも一緒に“公式訪問”とは、いいお父さんじゃないですか」と言われ、大統領のお人柄に接するとともに少しホッとしました。

大統領公邸から戻った後、今度はブラックタイの正装に着替えて、娘をハンガリーから来たベビーシッターさんに預け、トリニティー・カレッジでの晩餐会に妻と出席しました。さすがヨーロッパ最古の大学の一つと言われるだけあり、歴代の学長の巨大な肖像画で埋め尽くされたダイニングホールは壮麗でアイルランドの歴史の深さを肌で感じる事ができました。

研究と休日を兼ねて訪れたアイルランド。研究成果も多く僕も満喫しましたが、飛行機の中、膝の上ですやすやす眠る娘の顔はもっと満足げでした。



トリニティー・カレッジのダイニングホール。歴代学長の巨大な肖像画で埋め尽くされています。